

本ガイドは、オンライン鑑賞教育プログラム「オーギュスト・ロダン《地獄の門》VR(ヴァーチャルリアリティ)」の実施にあたって、教員の皆さまに知っていただきたい、作者や作品にまつわる情報をまとめたものです。プログラム実施の前にご一読いただき、充実した作品鑑賞へと生徒をナビゲートする一助としていただけたら幸いです。

目次

1. 本作品ガイドの位置づけ
2. オーギュスト・ロダン(1840-1917)について
3. 《地獄の門》の制作経緯
4. 各部の説明
5. 作品の着想源
6. 《地獄の門》に見るロダン彫刻の特徴
7. 《地獄の門》から生まれた作品たち

1. 本作品ガイドの位置づけ

本プログラムには、「対話による美術鑑賞」を取り入れています。ここでは、生徒がある作品に対してどのような発言をするか、それをどのように組織立てて一つの（あるいは複数の）意味生成へとたどり着くか、が重要となり、作品の背景にある歴史や知識は基本的には必要とされません。

ロダン作《地獄の門》は、相矛盾する様々な要素が混在し、研究者のなかでもその解釈が揺れ続けている複雑な作品です。それは、「解釈が見る人に委ねられている作品」とも言えるでしょう。本ガイドを通して伝えたいことは、《地獄の門》がそのような「開かれた作品」であることは、彫刻史に革新をもたらしたロダンならではの創意工夫や独創性によるものだということです。それは、「芸術作品は見る人が自由に解釈すればよい」という一般論にのみに帰するわけではありません。

本作品ガイドの内容は、本プログラムの「問い」に対する「答え」ではありません。基本的には、教員が作品について予習するための利用を想定しています。教員の皆さまには、本ガイドを通して作品の成り立ちを知っていただいたうえで、生徒たちとロダンの代表作とを出会い、対話をナビゲートしていただきたいと考えます。そのほか、生徒の発言を肯定し、作品に親しみを持ったり、関心を深めたりするため、話題転換を行うため、などの目的で情報を開示し、生徒たちの考察・発言の多様化や深化をうながすことに役立てていただけたら幸いです。

※対話による美術鑑賞については以下も参照。

上野行一『風神雷神はなぜ笑っているのか 対話による鑑賞完全講座』光村図書、2014年

2. オーギュスト・ロダン(1840-1917)について

フランスを代表する彫刻家オーギュスト・ロダンは、1840年のパリにて、警視庁の下級官吏の父のもとに生まれた。国立素描・算数専門学校で学んだ後、国立美術学校を受験するが失敗。彫刻家カリエ・ベルーズの助手として建築装飾などを手掛けながら研鑽を積んだ。ベルギーでのさらなる下積み期間を経て、1875-76年に制作した《青銅時代》で実質的なデビューを果たす。1880年に注文を受けた《地獄の門》の制作に生涯にわたって取り組むとともに、《カレーの市民》、《バルザック記念像》などの傑作を生み出す。その革新的な作品は、のちの世代に大きな影響を与え、近代彫刻の父として評価される。



エミール=アントワーヌ・ブールデル《ロダンの肖像》1909年
静岡県立美術館蔵

3. 《地獄の門》の制作経緯

1880 年 8 月、当時建設が予定されていた装飾美術館の扉の制作がロダンに依頼される。そして、おそらくロダン自身の提案によって、ルネサンスの詩人ダンテ・アリギエーリ(1265-1321)の叙事詩『神曲』から着想を得た浮彫が施されることになった。

当初は、フィレンツェ大聖堂付属洗礼堂にある初期ルネサンスの彫刻家ロレンツォ・ギベルティ(1381-1455)の《天国の門》にならって、扉部分が小区画に分割されていたが、やがて、ミケランジェロ(1475-1564)によるシスティーナ礼拝堂の大壁画《最後の審判》を手本とした、ダイナミックな構成へと変化していった。

制作の過程で、ロダンは小さな人物像を次々と生み出しては、扉を形づくる木枠の上に置いたり、位置を入れ替えたりを繰り返した。1885 年には、一旦、鑄造の準備が整っていたにも関わらず、その後も変更が加えられ、1900 年のパリ万博時に開催されたアルマ広場での展覧会では、人物像が取り除かれた石膏の土台だけが展示されている。結局、装飾美術館にこの門を設置する計画は実現せず、《地獄の門》がついに鑄造されたのは、ロダン没後のことだった。

現在、ブロンズで鑄造された《地獄の門》は、パリのロダン美術館に加えて、フィラデルフィアのロダン美術館、東京の国立西洋美術館、スイスのチューリヒ美術館、スタンフォード大学カンター視覚芸術センター、韓国のソウルにあるロダン・ギャラリー、メキシコ・シティのソウマヤ美術館、そして静岡県立美術館ロダン館に所蔵されている*。



《地獄の門 第三試作》
1880 - 81 年 (1992 年鑄造)
静岡県立美術館蔵

*ロダンは、死の前年である 1916 年に全作品とその複製権をフランス国家に寄贈した。その後、ブロンズ彫刻は、市場に出しても良いとされる 1/8 から 8/8 のナンバーが振られた 8 点と、美術館など公的機関による永年保存を目的とする I/IV から IV/IV の 4 点、計 12 点の鑄造のみがオリジナルと認められると、フランスの法律で定められた。ロダン美術館は、この原則の下、ロダン作品の没後鑄造を管理している。

4. 各部の説明

もともと建築物の一部として考えられた《地獄の門》は、垂直と平行のラインによって分割された、いくつかの主要部分によって構成されている。

※「三つの影」と「ティンパヌム」は本プログラム内でじっくり鑑賞する機会が設けられていないため、冒頭やステップ3に入る前に、ごく簡単に紹介してもよい。

三つの影

扉の上部で肩を寄せ合うように並ぶ三体の人物像。よく見るとサイズや姿勢が互いに一致し、同じ型から作られたことが分かる。三体の存在は、門全体の重心を上にならし、どっしりとした印象に軽やかさを与えている。腕(手が取りのぞかれている)によって門へと注意を促すこの三体は、一説によると、『神曲』「地獄編」の一節「この門を過ぎんとするものは一切の望みを捨てよ。」を表現している。

ティンパヌム*

ティンパヌムとは、建物の扉口の上部、横木とアーチ(《地獄の門》では矩形)のあいだに挟まれた壁面で、中世西ヨーロッパの大聖堂ではしばしば彫刻によって装飾されている。世界の終末において、神が人類の罪を審判する場面を描いた「最後の審判」を主題とする作例も多い。《地獄の門》では、「最後の審判」の主題において神が表される場所に「考える人」が置かれており、向かって左側には地獄の入口にまさにたどり着いた人々が、右側には審判が下された罪人たちが、表現されている。

*フランス語ではこの部分を「タンパン」と言う。

扉部分

「ウゴリーノ」や「パオロとフランチエスカ」といった『神曲』「地獄編」に具体的に由来する人物像が散見されることから、ここは地獄に堕ちて罰を受ける人物たちが、主要なテーマとなっていることが分かる。各像の大きさや、ねじれたり屈曲したりするポーズ、その組み合わせが多彩かつ独創的で、人物像が浅浮彫で表現された柱部分や、フリーズ状に並んだティンパヌムと比較しても、最もダイナミックで意表をつく構成となっている。

柱部分

扉の両側に位置する柱部分には、性別や年齢がさまざまな人物像が表現されている。右上と左下の赤子や老女が表現された部分は、罪を犯してはいないが、キリスト教の洗礼を受けずに亡くなったために天国に行くことができない人々が送られる場所、「辺獄」を表しているとされる。「辺獄」は、ダンテの『神曲』「地獄編」の第四歌に登場するが、ロダンがこのキリスト教の教義に強く関心を持った形跡はなく、直接のインスピレーション源は不明である。右下と左上は『神曲』「地獄編」第五歌に登場する肉欲におぼれて地獄に堕ちた人々、「恋人たちの環」を表しているとされる。歓喜と苦悩のはざまで、互いに触れ合いを求めたり、突き放したりする恋人たちを、様々なポーズや表情で表現することは、『地獄の門』の制作を通じて、ロダンが最も情熱を注いだテーマである。



6. 作品の着想源

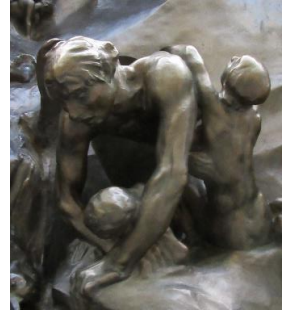
ダンテ『神曲』からインスピレーションを得て制作が始められた『地獄の門』であるが、ロダンの尽きせぬ想像力と関心は、様々な着想源を作品へと呼び込んだ。

◆ダンテ『神曲』に直接由来する人物像

本作品の直接の着想源は、ダンテ『神曲』の「地獄編」とされるが、作品の中で確認できる具体的な登場人物はわずかである。

・ウゴリーノと子どもたち

ウゴリーノは 13 世紀のイタリアに実在した人物で、「地獄編」第 33 歌に登場する。ピサにおける政争で何度も陣営を変えたのちに市民によって投獄され、息子や孫とともに餓死の刑を宣告された。ロダンは、この人物を子どもたちの亡骸の上に覆いかぶさるように表現した。



・パオロとフランチェスカ

「地獄編」第 5 歌に登場する恋人たち。フランチェスカは、年老いた夫の年の離れた弟であるパオロと恋に落ち、読書の最中に互いの愛を確認する。それを目撃した夫によって殺害された二人は、地獄の第二圏で、他の不義密通の罪人たちとともに、永遠に風のなかで漂う罰を受けることとなる。この恋人たちは、扉部分では《フギット・アモール》のかたちで、柱部分右下では《接吻》のかたちで繰り返し表現されている。

・三つの影

前述「各部の紹介」の説明を参照。

・考える人

ティンパヌム中央に座す「考える人」は、当初、地獄の様子を見下ろすダンテ自身（すなわち『神曲』の主人公）として構想され、1888 年に独立した作品として初めて発表された際には「詩人」と題されていた。「考える人」が置かれた《地獄の門》全体の複雑な展開や、独立した作品としての広範な普及、彫刻家自身の墓上への本像の設置などにより、「創造主としての芸術家自身」や「人間存在そのもの」といった様々な解釈がなされている。

◆『神曲』以外のインスピレーション

《地獄の門》を受注して数年後、ロダンの靈感源として、19 世紀の詩人シャルル・ボードレールの詩集『悪の華』が加わる。1886 年のジョルジュ・プティ画廊の展覧会では、《私は美しい》など、《地獄の門》の一部をなす人物像のいくつかにボードレールの詩が添えられて発表された。この詩人の影響によって、官能的で誘惑的な要素が加わり、また、苦しみの表現が和らいだことで、《地獄の門》はより普遍的な作品へと展開した。

その他、ギリシャ神話に登場する吟遊詩人「オルフェウス」の物語や、旧約聖書の説話「放蕩息子」に想を得たとされる人物像が《地獄の門》には組み込まれている。



左：《私は美しい》（ダラス美術館蔵）と、右：同じ原型から作られた地獄の門の柱上部の人物像

7. 《地獄の門》に見るロダン彫刻の特徴

ロダンは、《地獄の門》の制作を通して生み出した人物像を独立した作品として発表したり、異なる像を組み合わせる新たな作品を作り出したりした。その過程では、当時としては極めて独創的だった、次のような制作方法が用いられた。

◆形の反復

ブロンズ彫刻は、鋳型から作られるため、まったく同じ形をした作品を複数作ることができる。一人の男性像が 3 体並んだ「三つの影」や、右扉に 2 度登場する「フギット・アモール」の例にみられるように、ロダンは、同じ形を反復して一つの作品のなかに組み入れている。場所や角度を変えながら、ときには形の一部を切り取って使うなど、様々な組み合わせを試みた。



《フギット・アモール》と同じ原型から作られた人物像。右下にも角度を変えて登場する。

◆アッサンブラージュ

ロダンは、異なる作品同士を組み合わせて新しい作品を作り出す、アッサンブラージュ（寄せ集めるという意味のフランス語）の手法により、意味と形の実験を行った。《地獄の門》の左扉とティンパヌムのあいだで体をのけぞらせている「堕ちる男」と、「考える人」の傍らに座る「うずくまる女」は、組み合わせられて《私は美しい》という、「地獄」のイメージとはかけ離れた像へと作り替えられた。この2人組の像は、1887年に右側の柱上部に加えられた。

◆トルソ、断片の美

ロダンは、頭や手足を欠いた胴体像であるトルソ（イタリア語で「木の幹」）を、それ自体で完結した作品とみなした最初の彫刻家である。トルソの造形は、頭と腕や脚部をのぞいた胴が作り出すラインや動きの、研ぎ澄まされた美しさを、ダイレクトに伝えることができる。《地獄の門》のティンパヌム左上で弓なりに体をそらせた女性像(→)は、《アデルのトルソ》と称された作品から生み出された。このトルソは《永遠の青春》という別の作品にも活かされている。



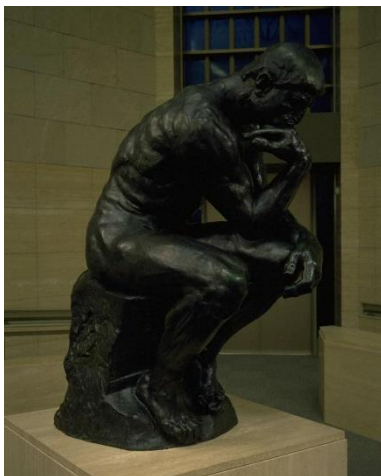
こうした革新的な制作方法を通じて、ロダンの作品は、歴史的な背景や美術史上の約束事を知らなくても、ポーズや表情、その身体の曲線などによって鑑賞者にある種の感情や概念を呼び起こす。その普遍的な性質は、ロダンのさまざまな試みの集大成である《地獄の門》が「開かれた作品」である所以となっている。

《アデルのトルソ》石膏 ロダン美術館蔵

Photo by Jean-Pierre Dalbéra - <https://www.flickr.com/photos/dalbera/36062705570/in/photostream/>

8. 《地獄の門》から生まれた作品たち

《地獄の門》の制作過程で生み出され、のちに独立した作品として発表された彫像たち。その一部が静岡県立美術館にも所蔵されている。



《考える人》(拡大版)
1880(拡大1902 - 04)年
静岡県立美術館蔵



《フギット・アモール》
大理石 1895 年以前
静岡県立美術館蔵



《パオロとフランチェスカ》
1887 - 1889 年頃(1993 年鑄造)
静岡県立美術館蔵

《〈影〉のトルソ》
1902 年（1991 年鑄造）
静岡県立美術館蔵



左：《地獄の門》左柱上部の人物像
右：《壺をもつカリアティード》
1883 年頃（1986 年鑄造）
静岡県立美術館蔵



■静岡県立美術館ロダン館で見られる作品については、以下のウェブページもご参照ください。

静岡県立美術館ロダン館
<https://spmoa.shizuoka.shizuoka.jp/rodin/>



オーギュスト・ロダン《地獄の門》VR オンライン鑑賞教育プログラム
教員向け作品ガイド（バージョン1）2023 年 3 月 31 日

企画・編集：静岡県立美術館学芸課 ※本ガイドの無断での転載を禁じます。